

GPT, ALP, t-Bil いずれも不変であり, steroid 抵抗例と考えられる. 治療方針の検討, および注意深い経過観察が必要と考えられた.

#### 12) 当院における自己免疫性肝炎症例の検討

瀧本 光弘・坂内 均 (済生会三条病院)  
渡辺 俊明 (消化器科)

今回我々は当院における自己免疫性肝炎を集計した. 対象は, 92年4月から2000年5月までの17例を対象とした. 男性1例, 女性16例, 平均年齢52.5歳, 平均観察期間40.8ヶ月. 国際診断基準(AIH score)は平均14.4で, 確診例6例, 疑診例11例だった.

診断の契機は, 無症状例から急激に発症する症例など, その発病様式は多彩であった.

腹腔鏡所見は, 粗大な起伏性凸凹や出血斑型赤色紋理を認める症例が多く, 組織所見は, 実質障害が強く, ロゼット形成や形質細胞浸潤を認める症例が多かった. 合併疾患で, PBC, RA, ITP などの他の自己免疫性疾患の経過中に発病した症例も6例みられた. 17例中13例はウルソやステロイド投与等で良好な経過を示したが, 発病から1年以内に急性肝不全様経過をとり死亡した症例も3例あった.

#### 13) 抗痙攣薬による薬剤性肝障害と考えられた一例

早川 晃史・澤村 一司 (新潟こばり病院)  
消化器内科

64歳女性. 僧帽弁置換術後, 胃潰瘍, うつ病にて加療中. 本年1月9日, 血清 Na 110 mEq/l, K 1.4 mEq/l と高度電解質以上を認め当院入院. 同日痙攣が出現, 人工呼吸器管理, ミダゾラム, フェニトイン, バルプロ酸投与を開始した. 1月14日, GOT 2346 U/l, GPT 1786 U/l, 翌15日, GPT は6285 U/l と著増. ANA, HbsAg, anti-HCV はいずれも陰性. NH<sub>3</sub> は182.7 μg/dl と増加していた. 経過中, 血圧低下は認められなかった. 薬剤性肝障害を疑い, 1月15日より血漿交換3日間, SNMC 静注およびラクツロース浣腸を連日施行し, 軽快をみた. 抗痙攣薬が最も疑われ, DLST でもフェニトイン, バルプロ酸はいずれも陽性のため中止, 以後は肝障害の再燃は認めなかった. バルプロ酸は他の抗痙攣薬と併用した場合, 薬剤性肝障害の発症頻度が上昇するといわれ, 使用に際しては十分な注意が必要であ

る.

#### 14) 自然経過を観察し得た炎症性偽腫瘍 (inflammatory pseudotumour) の1例

鈴木 康史・津田 隆志  
津田 晶子・滝沢 英昭  
太田 隆志・矢田 省吾 (医療生協木戸病院)  
濱 齊 (内科)  
山田 明・阿部 要一 (同 外科)  
野本 実・青柳 豊 (新潟大学)  
第三内科

比較的稀とされる, 肝に発生した炎症性偽腫瘍の1例を経験したので報告する. 症例は, 75歳, 男性. 食欲減退, 飲酒不能, 低温火傷を主訴として入院した. 入院後施行した GTF にて, 胃体部後壁に壁外性の高度の圧排所見を認めた. 腹部 CT, MRI にては, 胃および膈の間と肝 S1 領域に嚢胞性病変を認めた. また, 肝左葉外側区域にφ30mm の腫瘍性病変を確認した. 大腸内視鏡検査にては, AV10cm にφ10mm の赤色ポリープ, Ip 型を認めたが, ポリペクトミー後の診断は, Adenocarcinoma in adenoma, well, sm 1, ly 0, v 0, cut end (-) の診断のみであった. 腹部血管造影他施行後, 肝生検を施行, 上記診断が示唆された. 入院より3.5カ月経過した時点で, 肝腫瘍像のほぼ消失ならびに嚢胞性病変の自然退縮を確認し得たので, 画像および組織所見などの供覧を試みたい.

#### 15) 総胆管結石胆嚢結石を合併した混合型肝癌の1例

横田 隆司・小林 由夏  
倉岡 賢輔・松林 宏行 (立川総合病院)  
飯利 孝雄・七條 公利 (消化器内科)  
多田 哲也 (同 外科)  
佐藤 啓一 (同 病理)

原発性肝癌は肝細胞由来の肝細胞癌と肝内胆管細胞由来の胆管細胞癌に大別されるが, 同一肝臓内に両者が混在する混合型肝癌はまれであり, 原発性肝癌の0.47%程とされている.

今回我々は診断に苦慮した混合型肝癌の一例を経験したので報告する.

症例は53歳女性, 右季肋部痛, 黄疸を主訴に当科入院. 入院時血液検査では T-Bil 4.5, GPT 808, GOT 344, LDH 791, ALP 819, γ-GTP 385 と黄疸及び肝胆道系酵素の上昇を認めた. HBsAg (-), HCV (-), AFP と PIVKA-II はともに正常であったが CA19-

9が2531と著明に上昇していた。腹部超音波検査では胆嚢結石、総胆管結石を認める他、肝門部に径45mm大の不均一な低エコー腫瘤を認めた。ERCPでは結石及び肝内胆管の拡張は確認されたが、腫瘍性病変については指摘しえなかった。腹部CTでは肝門部の腫瘍において周囲の造影効果を認め、腹部血管造影も同様に周囲に淡い腫瘍濃染像を認めた。以上より総胆管結石、胆嚢結石を伴った肝内胆管癌又は転移性肝癌を疑い、エコー下肝生検を施行した。肝生検HE標本では腫瘍細胞が索状に増生していることから肝細胞癌と診断、手術を施行したが術中診断にて上腹部を中心に播種性腹膜転移を認めたため切除不能と判断した。肝腫瘍部術中生検組織標本に対してサイトケラチン染色を施行、サイトケラチン8、19陽性である事から肝細胞、胆管細胞いずれの性格を有している混合型肝癌と診断した。

肝腫瘍を診断するにあたり画像上肝細胞癌に非典型的であってもCA19-9が高値を示す症例には混合型肝癌も念頭において診断する事が重要と考えられた。

#### 16) 肝原発カルチノイドの一例

波田野 徹・富樫 忠之  
 稲田 勢介・佐藤 知巳 (長岡中央総合)  
 富所 隆・杉山 一教 (病院内科)

症例は62才男性。1998年6月4日右季肋部痛出現し肝腫大を認め6月5日精査入院。肝は右季肋下5横指触知し、入院時検査ではHBs抗原(-)HCV抗体(-)ALP 337 IU/l, 5-HIAA 6.5 ng/ml と上昇を認め、AFP, PIVKA-IIは正常でCA19-9は50.6 U/mlと軽度高値であった。腹部CT, MRIで肝右葉に広範な腫瘍を認め、腹部血管造影では肝動脈圧排所見、一部腫瘍濃染像がみられ、MMC, 5-FU, ADMを肝動注した。動注を計6回施行したが肝不全にて1999年12月13日死亡。剖検で肝の大部分は腫瘍で占められ腫瘍壊死の所見を認めた。病理所見では腫瘍細胞の腺腔様構造を認め、Grimelius染色(+), S-100蛋白染色(+), 電顕で内分泌顆粒が検出させ、肝原発カルチノイドと診断した。

#### 17) 肝損傷に対する外科治療の評価

大谷 哲也・齋藤 英樹  
 片柳 憲雄・藍澤喜久雄 (新潟市民病院)  
 山本 睦生 (外科)  
 新田 幸寿・内藤 真一 (同 小児外科)  
 広瀬 保夫・木下 秀則  
 田中 敏春 (同 救急部)

【目的】肝損傷の外科治療成績及びTAEを中心とした保存療法の成績につき検討した。【対象と方法】1989年1月から2000年6月までに手術又はTAEが施行された肝損傷53例を対象とした。肝損傷重傷度分類はAASTを用いgradeⅢ以上を重傷肝損傷と定義した。【結果】1. 穿通性肝損傷(n=9): 全例緊急手術が施行され、gradeⅡ5例、gradeⅢ4例であった。9例中7例に合併損傷を認め平均出血量は2082 mlであった。死亡例はなかった。2. 鈍的肝損傷(n=44): 24例に緊急手術が施行され、morbidityは50%, liver related mortalityは25%であった。20例は初期治療としてTAEが施行され、うち3例(gradeⅢ; 1, IV; 1, V; 1)はTAE直後に手術を施行した。TAE20症例のmorbidityは25%, liver related mortalityは5%であった。鈍的肝損傷のgrade別mortalityは、I-II(n=10); 0%, III-IV(n=26); 3.8%, V-VI(n=8); 75%であった。TAE導入前(n=16)のliver related mortalityは38%, TAE導入後(n=28)は3.5%であった。【結語】1. 穿通性肝損傷は手術の絶対的適応であり成績は良好である。2. 鈍的肝損傷に対する保存療法はTAEを適切に実施することで安全に行える。3. 術前TAEを併用することで、重傷鈍的肝損傷の手術成績は今後更に改善されるであろう。

#### 18) TAEを施行した肝外傷症例の検討

広瀬 保夫・田中 敏春 (新潟市民病院)  
 救命救急センター)  
 畑 耕治郎・五十嵐健太郎 (同 消化器科)  
 大谷 哲也・齋藤 英樹 (同 外科)

当救命救急センターでは、鈍的肝損傷に対して、積極的に経カテーテル的肝動脈塞栓術(TAE)を行っている。当施設における鈍的肝損傷TAE施行例について検討した。

1989年4月~2000年6月までに当院救命救急センターに入院した肝損傷110例のうち、TAEを行った20例を対象とした。性別は男性18名女性2名。平均年齢41.5